



天然記念物

伊吹山地草原植物 およびその自生地

伊吹山の自然環境

伊吹山地は滋賀県の北東部に位置し、北は福井県、東は岐阜県に接しています。北から三国岳(1,100m)、土倉岳(1,002m)、金糞岳(1,314m)、新穂山(1,067m)、胡桃山(1,183m)と連なり、そして南端に最高峰の伊吹山(1,377.4m)があります。この山地の西斜面に発した美しい溪流は合して姉川・高時川となつてびわ湖に注いでいます。伊吹山頂での快晴の日の眺望はすばらしく、北東には中部山岳地帯、南東には濃尾平野や伊勢湾、西には日本一の大きさをもつびわ湖が陽光に輝いているのが見られます。

伊吹山とその周辺部の地質は大部分が古生代二畳紀(約2億5千万年前)の石灰岩層で、北は国見峠から北尾根沿いに幅広く山頂へ伸び、さらに滋賀県側、岐阜県側の山腹まで拡がり、南は上平寺越付近まで下っています。金山が典型的な石灰岩地帯で、いたるところにカレンフェルト(墓石)地形や大きな露岩が見られ、石灰洞窟、滝、断層などの山岳景観にも富んでいます。この石灰岩の中にフズリナ、ウミユリ、貝などの化石が含まれ、大

昔は海底であったことを物語っています。石灰岩層は水の透過が著しく、植物の生育に乾燥した条件を与えます。一方、中腹から山麓にかけて非石灰岩層も見られます。

気象に関しては、伊吹山測候所の1921～1950年の統計資料によると、年平均気温が山頂で5.7℃、山麓の春照で12.9℃となっており、中腹以上は冷温帯に入ります。また年平均降水量が2,329mmと多い方です。日本海に近い関係で積雪日数が多く(70～90日)、さらに山頂付近は冬季シベリア方面からくる寒冷な季節風が突き当って、かなり高山的な気象条件をつくっています。気候区分は裏日本型に属します。

伊吹山の植物分布の特色

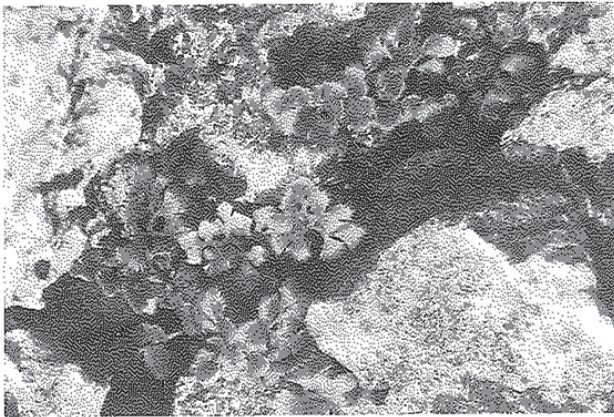
伊吹山は日本のほぼ中央に位置し、過去の寒冷だった時代に北方系の植物が南下してきたり、温暖になると西南部の植物が東北部へ移動する通路となってきました。また日本海に近い関係から、日本海要素の植物も分布します。さらに典型的な石灰岩地帯という特殊性から美しい広葉草原や好石灰植物も見られます。なお古い山なので特産種もいくつか存



伊吹山の全景(西南斜面)



ニッコウキスゲ群落と伊吹山頂測候所



イチョウシダ(好石灰植物)

在します。昔から草本植物や薬草の宝庫として世に知られ、また多くの学者によって調査が行われ、植物研究史上重要な山になっています。次に種々の特色を列記して説明します。

(1) 石灰岩地を好んで生える植物（好石灰植物）が見られます。

例：イチョウシダ、クモノスシダ、キバナハタザオ、イブキシモツケ、コゴメグサ、イワツクバネウツギ、ヒメフウロ、クサボタン

(2) 山頂付近には、北方系の植物（高山性植物または亜高山性植物と通称されるもの）が多数生育します。

例：ニッコウキスゲ、キオン、メタカラコウ、サンカヨウ、コキンバイ、イブキトラノオなどや北方からの分布の西南限になっているものにグンナイフウロ、ハクサンフウロ、エゾフウロ、イワシモツケ、ヒメイズイ、キンバイソウ、イブキソモソモなどがあります。

(3) 日本海要素（日本海側斜面に発生・分化して、多雪地帯に分布する植物）が多く見られます。

例：エゾユズリハ、ミヤマイラクサ、ハクサンカメバヒキオコシ、オオヨモギ、オオバクロモジ、ハイイヌガヤ、タムシバ、スマレサイシン、イブキトリカブト、ヒメモチ

(4) 特産種（固有種）が見られます。山頂付近が石灰岩の風衝地という特殊条件のため、新種形成が行なわれたと考えられます。

例：ルリトラノオ、コイブキアザミ、コバノミミナグサ、イブキレイジンソウ、コゴメグサ、イブキタンポポなど。またヨーロッパ原産のキバナノレンリソウ、イブキノエンドウ、イブキカモジグサなどの牧草が古くから伊吹山にのみ分布することから、織田信長がポルトガルの宣教師に命じて薬草園を開かせたという説が裏付けられます。

伊吹山のお花畑

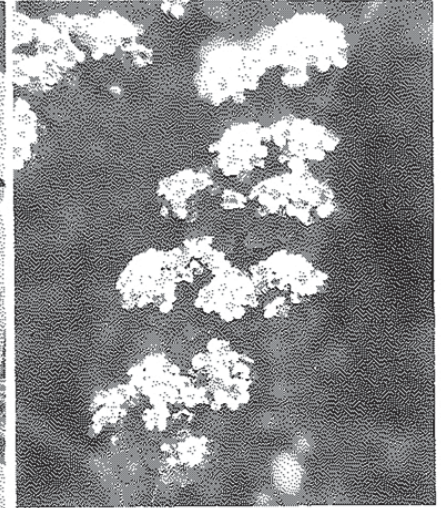
伊吹山は全山がびわ湖国定公園の特別地域に指定され、また標高 1,200m～1,350m間（面積651,250㎡）は「伊吹山地草原植物およびその自生地」として昭和40年8月9日滋賀県指定天然記念物になり、滋賀県文化財保護条例によって植物採集や現状変更がかたく禁じられています。現在国指定に昇格させる手続きがされつつあります。山頂のお花畑は7月中旬から8月下旬にかけてが最も美しく、



グンナイフウロ(南限種)



ヒメイズイ(南限種)



イワシモツケ(南限種)

百花が咲き乱れる様は高山のお花畑に匹敵し、その美しさは近畿地方の他山には見られません。

お花畑の主な草本を列記してみると、※オオバギボウシ、ショウジョウスゲ、コキンバイ、※ニッコウキスゲ、アカソ、※ルリトラノオ、キヌタソウ、※イブキトリカブト、※イブキトラノオ、※サラシナショウマ、クサボタン、オトギリソウ、イブキガラシ(ヤマガラシ)、キリンソウ、アカ



ルリトラノオ(特産種)



コイブキアザミ(特産種)

ショウマ、※シモツケソウ、ダイコンソウ、※グンナイフウロ、エゾフウロ、イブキフウロ、ミツバフウロ、ノダケ、シシウド、キバナノカワラマツバ、クガイソウ、ヒョクソウ、※フジテンニンソウ、オオヨモギ、※リュウノウギク、※コイブキアザミ、※メタカラコウ、タムラソウ、※アキノキリンソウ、※ホソバシュロソウ、アオテンナンショウ、ツリガネニンジン、カノコソウ、クサタチバナ、※リンドウ、イワアカバナ、ミツバベンケイソウ、タカトウダイ(イブキタイゲキ)、クサフジ、キバナノレンリソウなどがあります。

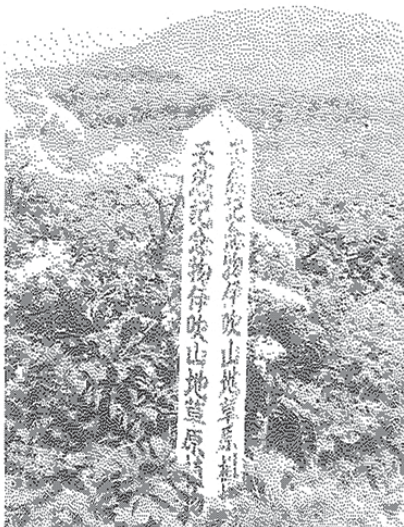
(※印は特に多数開花して山頂を多彩に色ど

るもの、下線を引いたものは8月中旬から9月に開花、他はそれより早く開花するもの。)

お花畑の成因には、①石灰岩地で土壌の水はけがよく、表土の乾燥が著しいこと、②冬季に寒風が激しく吹き、積雪量が多いこと、③昔、牛馬の飼料や田畑の肥料に草刈りが行われたことがあげられます。

伊吹山は薬草の宝庫

延長5年(927)に書かれた「延喜式」巻37に、当時典薬寮(宮中の薬局)へ諸国から送られた雑薬料の品目数が記されていますが、一番多いのが近江の国73種で、次に美濃62種、出雲・播磨53種、伊勢50種と次第に数が減っ



▶ 広葉草原(伊吹山頂)
◀ 天然記念物伊吹山地草原植物



ています。近江や美濃が多かったのは、伊吹山があったからとも考えられます。古くからたびたび採薬使が登った記録があります。伊吹山の薬草には、イカリソウ、リンドウ、センブリ、ハシリドコロ、ミヤマトウキ、フウロソウ、オオヨモギ、トチバナ



ミヤマイラクサ(日本海要素)



キバナノレンリソウ(ヨーロッパ原産)

ンジン、マツブサ、イブキボウフウ、ウツボグサ、オウレン、クララ、サラシナショウマなど約 250種余りの民間薬草や局方薬草を産します。

伊吹山の植生

伊吹山全体では羊歯植物以上の高等植物が約 1,200種自生していますが、それぞれの種によって生育する高さや環境が違い、それに応じて多数の種がうまく組合わさって、いろいろな草本群落や森林をつくっています。山麓の海拔 600m まではスギ、ヒノキの植林が

多く、他はアベマキーコナラ林のような薪炭林となっていますが、放置されるとシラカシ林ができる領域です。さらに 900m 付近まではミズナラ林のような薪炭林で、およそ30年毎に伐採されています。場所によりブナがまじるので原植生はブナ林と考えられます。900m 以上 1,200m までは傾斜のきつい石灰岩の風衝地になっているため、ブナの成育が悪く、オオイタヤメイゲツ林（石灰岩地特有の自然林で、多数の珍しい植物を温存しています。）となっています。お花畑は山頂一帯のほか、

以前は滋賀県側西南斜面にも広く見られましたが、最近草刈りがなくなったため、ススキ群落や低木群落が繁殖して面積をせばめつつあります。また山頂中央は登山客が集中するため、オオバコやスズメノカタビラなどの踏み跡植生になっています。わたしたちは、これ以上の自然破壊をやめて、この美しい伊吹山の自然を保全し、後世に遺したいものです。

(長浜高等学校 村瀬忠義氏提供)



オオイタヤメイゲツ林